

「世界若者ウチナンチュ連合会」、「世界のウチナンチュの日」という希望
－ 世界のウチナンチュ大会に寄せて －

第7回世界のウチナンチュ大会は、昨年2022年10月30日の前夜祭（国際通りパレード）を皮切りに、10月31日から11月3日まで那覇市を中心に開催された。大会は1990年から始まり今まで5年に1度開かれてきた。今第7回大会は2021年が開催年だったがコロナの影響で1年延期となり、2022年に6年振りに開かれた。

1990年の第1回大会以降、大会の都度、各種事業が着手されてきた。第1回大会では、ウチナー民間大使の設立、第2回大会（1995年）では、世界の沖縄県系の経営者らでつくるWUB（World-wide・Uchinanchu・Business・Association）ネットワークの設立、第3回大会（2001年）では、ジュニアスタディツアーの開始、第4回大会（2006年）では、ホストファミリーバンク制度の発足、という具合である。

この号では、第5回大会（2011年）で発足が決まった「世界若者ウチナンチュ連合会（WYUA）」と、第6回大会（2016年）で制定された「世界のウチナンチュの日」を取り上げる。

(1) 第7回世界若者ウチナンチュ大会(2022年)の開催



「若者宣言」をおこなう比嘉千穂さん

2022年10月27～29日、世界のウチナンチュ大会に先がけて開かれた第7回世界若者ウチナンチュ大会の目的は、次世代のウチナンチュたちがアイデンティティを再確認し、交流を深めること、沖縄の文化や芸能、歴史を継承し、地域社会の発展に貢献することであった。

今大会のテーマは、「集まれ、世界のわかむん。島ぬくくるにちむどんどん！」。主な日程は、10月27日 オープニングセレモニーと、移民の経験を学ぶ「おじー・おばーの HISTORY」（オンライン）、28日 県内の地域の魅力を紹介する「あなたの市町村自慢」（オンライン）、29日 アイデンティティと文化継承をテーマに意見交換する「ゆんたく会」（オンライン）と対面でのスポーツイベント「Uchinanpic 2022」の名桜大学での開催だった。

コロナ禍の影響もあり、オンラインプログラムが日程の多くを占めた。この点も含めて、大会実行委員長で、世界若者ウチナンチュ連合会（WYUA）代表の比嘉千穂は、11月3日、第7回世界のウチナンチュ大会閉会式で、次の「若者宣言」をおこなった。

ウチナンチュであることの誇り、私にとって、世界のウチナンチュの皆さんと出会わなければ、その誇りを確信することはできませんでした。

2012年から、多くの方のご協力を得てブラジル、アメリカ、ドイツ、フィリピン、沖縄、ペルーで「世界若者ウチナンチュ大会」を開催いたしました。

今大会は、オンラインプログラムを通して、祖父母の歴史を振り返り、同じルーツを持つ市町村同士を深めることで、自分自身のアイデンティティを肯定でき、家族、そして沖縄に対しても更に誇りに思える機会を創出できたと考えます。

コロナ禍で、新しい実行委員とともに大会を作り上げるのは非常に大変でしたが、同時に、海を越え、想像を絶する困難にも立ち向かい、人生を切り開いていった1世や先輩たちの存在が、励みとなりました。

最後となりますが、今後も世界のウチナンチュの皆さんと力を合わせられるよう努力し、私たちらしく新たなことに挑戦していくことを宣言し、ご挨拶とさせていただきます。

まじゅん、はまていいか（一緒に頑張りましょう）
いっぺー にふえーでーびたん。

(2) 世界若者ウチナンチュ連合会(WYUA)の誕生

前述したように、2011年の第5回世界のウチナンチュ大会で、世界若者ウチナンチュ連合会（WYUA）の発足が決まった。

WYUAが誕生する、その“出逢い”についてWYUAのホームページ（以下HP）で、以下のように記述している。

（2011年3月の）出逢いは突然。とあるイベントでたまたま居合わせた、居合わせられた？韓国と沖縄をつなごうと活動していた大学生、沖縄から海

外に渡った移住者の子弟と交流した人、アメリカの沖縄県人会に行ってきた人など、とにかく沖縄と海外というキーワードに惹かれた若者たちが集い、2011年10月に開催する第5回世界のウチナーンチュ大会に向けて、アイデアを出し合うことに（なった）。

その後、第5回世界のウチナーンチュ大会に向けて若者たちは動き出すことになる。

3月のイベントに居合わせたメンバー6名が集まりだした。世界のウチナーンチュ大会に馴染みのある者もない者も様々だったが共通していたのは、「沖縄へ感謝」、「沖縄と海外をつなげたい」という思いだった。メンバーも徐々に増え、沖縄移民についての勉強会、創作劇「琉球ストンプ」の練習、月1回のプレイベントの開催など、ぶつかりあいながら、わくわくが止まらない毎日。（HP）

そして、いよいよ第5回世界のウチナーンチュ大会を迎えた。

大会期間中に7カ国7地域の代表が集まり「若者国際会議」を実施。沖縄県知事に向けて、本連合会設立と、2016年まで海外5地域で「世界若者ウチナーンチュ大会」を実施すること等、7つの事業の提言を行うつもりが宣言に（笑）。（HP）

「提言」をおこなう心積もりだったものが、大会で「若者宣言」を発するに至ったと、そのとんとん拍子さにいささかの驚きを込めて“(笑)”と表現している。

こうして船出した WYUA は、2012年に第1回世界若者ウチナーンチュ大会をブラジル（テーマ「肝合ち ウチナーぬ心 世界報までい」、7ヶ国、156名参加）で開催したのを皮切りに、2013年に第2回大会をアメリカ（「アメリカのウチナーンチュに火をつけよう」、8ヶ国10地域以上、151名）、2014年に第3回大会をドイツ（「ヨーロッパに沖縄の種を植えよう」、4ヶ国、35名）、2015年に第4回大会をフィリピン（「生まれジマぬ心 ウチナーぬ架け橋へ」、5ヶ国、80名）、2016年に第5回



国際通りパレード(Guam)

大会を沖縄（「我が^{かなみ}要^{いさ}ウチナー^{かじとうむ} 勇み風共に^は 走らせシンカヌ^{ちやー}達」、9ヶ国1地域、約100人）、2018年に第6回大会をペルー（「世界に響け ウチナーの鼓動」、7ヶ国、254名）という具合に、矢継ぎ早に開催してきた。このほとぼしる若者の行動力には驚愕せざるを得ない。

振り返れば、第1回大会において、ブラジル到着ロビーで待っていてくれたのは「うりずんの会」（沖縄留学OBOG会）で、ブラジル沖縄県人会の協力もあった。ドイツでの第3回大会では三線で沖縄文化を広めるためドイツ沖縄県人会に三線10丁を寄贈した。さらに沖縄からの移民がアジアで最も多いフィリピンで開かれた、第4回大会でもフィリピン沖縄県人会の協力を得ている。

大会時のみならず、その準備も含めて、メンバーは2012年にハワイ、アメリカ、2013年にボリビア、2014年にボリビア、ペルー、アルゼンチン、イギリス、ドイツ、フランス、フィリピンを訪ねている。世界をまたにかけた縦横無尽な行動も、世界中に広がるウチナーンチュのネットワークがあればこそ実現できたものであろう。

このような確実な実績を積み重ねて、2022年、第7回大会が再度沖縄で開催されるに至ったわけである。

付け加えると、WYUAは2015年に任意団体から一般社団法人へと脱皮した。

(3) ウチナーンチュとしての自己認識(アイデンティティー)

ウチナーンチュとしての自己認識(アイデンティティー)は、筆者の論稿『ウチナーンチュから聞こえる<沖縄の不条理>50年』において、島袋が、

住んでる地域で自分で琉球人と意識するきっかけはほとんどないはずで
す。本土に行って違いを指摘されて。沖縄にいる間は認識しない、比較し
ようがないから。それは外に出て、あるいは帰って来て、初めて感じるよ
うなもので。私たちとは違うという感覚で帰ってくる。

(『東アジア共同体・沖縄(琉球)研究 6号』25ページ)

と述べているように、ほか(この場合はヤマトウ)と比較して、「外に出て」ウチナーンチュであることを「初めて感じる」、異質を感じるのである。

もう一つは、海外に住むウチナーンチュとの出会いがある。その逆に3世、4世たちが沖縄に来て、ウチナーンチュと出会う。ここで



国際通りパレード(ペルー)

は前者と異なり、その同質を感じるのだ。こうした二つの軸と呼べる体験を通じて若者の中にウチナーンチュとしての自己認識（アイデンティティー）が芽生え、深まっていくのではないだろうか。

WYUAの職員となった金城しずくは、「沖縄の人たちは、海外ウチナーンチュと実際に会い、関わるのが大事だと思う」。「私だって昔はウチナーンチュ大会をひとつとと思ってい」たが、「実際に参加すれば、きっと感動します」と語っている。ジャーナリストの三山喬は、「出会いが感動を呼び、感動が沖縄愛になる。他県にないルーツ県としての温かみがあればこそ、沖縄県系の人々の連帯は際立ち、続いているのだろう」（『AERA』2022年11月21日）と述べている。

ウチナーンチュ大会が沖縄の若者に与える刺激に期待する WYUA 代表の比嘉千穂は、その理由を「沖縄を離れずに過ごす日常生活では、改めてアイデンティティーを考える機会がほとんどないからだ」（『AERA』2022年11月21日）と語る。ともに筆者の見解と差異はないといえよう。

2017年に名桜大学に交換留学生として沖縄に来た金城ビアンカひかりは、その後、名桜大学に正式に入学し、卒業して現在 JICA 日系社会研修員を勤めるブラジル3世である。彼女は「第7回世界若者ウチナーンチュ大会」でプランニングチームのリーダーを務めた。彼女はウチナーンチュとしてのアイデンティティーを次のように語っている。

私の実家にたくさん置いてあるシーサーが沖縄のいろんなところで見られました。私の家族がよく作る食べ物も、沖縄の人は食べていました。そして私の家族が使う、日本語でもない、ポルトガル語でもない言葉を沖縄の人が使っていました。沖縄の文化や歴史を学べば学ぶほど、私の家族を近く感じました。そこで初めて『うちなーんちゅ』というアイデンティティーを持つようになったのです。

（『わったー世界のウチナーンチュ！』214～15ページ）

さらに、プランニングチームのリーダーを務めたことについて、

国籍や言語が違ってもウチナーンチュの子孫であるという接点だけで世界中の若者が交流した。多くのことを学ぶ貴重な経験ができ、感謝の気持ちでいっぱいだ。

（『琉球新報』「各界の4人が振り返る2022」2022年12月31日付）

とも述べている。

(4) 世界若者ウチナンチュ連合会(WYUA)のめざすもの

18歳～35歳を構成メンバーとするWYUAの理念（コンセプト）は、次の通りである。

私たちは、海外と沖縄の人的ネットワークを最大限に活用し、若者の挑戦を通して地域の人びとに元気と感動を届け、地域社会の発展に貢献する。

沖縄県は日本有数の移民県であり、その歴史は1899年から始まります。多くの県民が海外へ雄飛し、海を渡った沖縄人やその家族を合わせ、現在約40万人のウチナンチュが北米、南米、欧州、アジア



「第7回世界のウチナンチュ大会」開会式

など世界各地に在住しているといわれています。この100年の間に、海外移民があり、沖縄戦があり、戦後何もなくなった時代には、沖縄を復興させようと移民先からは救援活動が始まりました。

私たちは、それらの戦前戦後の沖縄を支えてきた海外の沖縄県系のネットワークや、沖縄県内の青年ネットワークを最大限に生かし、海外・沖縄県内の若者の挑戦を通して、文化・芸能・歴史の継承や青年活動など地域社会の発展に貢献することを目的として活動しています。

としている。

(5) 「世界のウチナンチュの日」制定

次に、「世界のウチナンチュの日」制定を見よう。

アルゼンチン3世の比嘉アンドレスとペルー3世の伊佐正アンドレスからの提唱を受けて、第6回大会（2016年）の閉会式当日、翁長雄志知事が10月30日を「世界のウチナンチュの日」と制定すると宣言するところとなった。

提唱者の一人である比嘉アンドレスは、制定に至る経緯を

五年に一度だけ、打ち上げ花火みたいに大会を開くだけじゃもったいない。せめて年に一度、ウチナンチュの結びつきについて世界中で考える

日を設けたい。…心の底から楽しくみんなが祝える日。…そう提案したのです。(『還流する魂^{マフイ}ー世界のウチナンチュ 120年の物語』197ページ)

と語っている。

以下は「世界のウチナンチュの日」行動宣言文である。

我々は今日、世界のウチナンチュのみなさんに伝えたい。

我々ウチナンチュは持っている。

我々ウチナンチュは、未来を創造する力を持っている。

我々ウチナンチュは、未来への希望を持っている。

我々ウチナンチュは、世界へ飛び立つ勇氣を持っている。

我々ウチナンチュは、互いを許し合う寛容の心を持っている。

我々ウチナンチュは、互いを助け合う相互扶助の心を持っている。

我々ウチナンチュは、豊かな伝統文化を持っている。

我々ウチナンチュは、困難に打ち勝つ不屈の精神を持っている。

我々ウチナンチュは、先祖への感謝の心を持っている。

我々ウチナンチュは、家族を愛する心を持っている。

我々ウチナンチュは、出会った人を愛する心を持っている。

我々ウチナンチュは、郷土を愛する心を持っている。

我々ウチナンチュは、平和を愛する心を持っている。

我々ウチナンチュは、ウチナンチュであることに誇りを持っている。

ウチナンチュは一つになる。

5年の時を経て、今日、また、世界中からウチナンチュが集い、心が一つになった。

ウチナンチュがウチナンチュであることを祝おうではないか。

ふたたび世界中からウチナンチュが集まった今日 10月30日を祝い、「世界のウチナンチュの日」としようではないか。

今日 10月30日を「世界のウチナンチュの日」とし、この誇りを我々ウチナンチュの魂に刻み込もうではないか。

ここに、誇りを持って宣言します。今日は、「世界のウチナンチュの日」です。

今日は、めでたい「世界のウチナンチュの日」です。

おめでとう、世界のウチナンチュ。いっぺーにふえーで一びる。サンキュー ベリー マッチ。ムチャス グラシマス。ムイト オブリガード。ちばらなやーさい。頑張ろう。

この行動宣言文を一読し、直ぐに 1922年の「水平社宣言」がぼくの頭をよぎ

った。被差別部落民と琉球・沖縄人とは民族差別として括れるものでなければ、その歴史も文化もまったく異なるのだが、この両者の宣言が類似し、その格調の高さに感服した。

「水平社宣言」は冒頭、「全国に散在する吾が特殊部落民よ団結せよ。」から始まる。一方、「世界のウチナーンチュの日行動宣言文」は、「我々は今日、世界のウチナーンチュのみなさんに伝えたい。」と柔らかい文体だ。前者は、「吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ。」と自らと仲間を鼓舞する文章で、ここには発想の転換がなされている。後者は、「我々ウチナーンチュは、ウチナーンチュであることに誇りを持っている。」と、同じ観点から語っている。沖縄には被差別部落が存在しないから、「水平社宣言」を参考にしたとは思えないのだが、その観点は何と類似していることだろう。

ともにマイノリティとして生き、差別されてきた者たちが自らの存在を誇りとすると表明するのだ。



閉会式グランドフィナーレ

「水平社宣言」は、「かくして生まれた。人の世に熱あれ、人間に光あれ。」と締めくくる。「行動宣言文」は、「世界中からウチナーンチュが集まった今日 10 月 30 日を祝い、「『世界のウチナーンチュの日』とし、この誇りを我々ウチナーンチュの魂に刻み込もうではないか。」「今日は、めでたい『世界のウチナーンチュの日』です。」と宣言する。あくまでも明るく、軽やかなリズムである。

ところで、この「世界のウチナーンチュの日」のほかに、沖縄県が制定したものに次のような記念日がある。

- 5 月 15 日 本土「復帰」記念日
 - 6 月 23 日 慰霊の日
 - 9 月 18 日 しまくとぅば（島言葉）の日
 - 11 月 1 日 琉球歴史文化の日
- そのほかに
- 観光事業協同組合が制定した
 - 2 月 1 日 琉球王国建国記念の日
 - 県教育委員会が制定した
 - 11 月 1 日 美ら島おきなわ教育の日

酒造組合連合会が制定した
11月1日 泡盛の日
などもある。

(6) 世界のウチナーンチュ大会－「同化」と「自立」のせめぎ合い

世界のウチナーンチュ大会の高揚を前出の三山喬は、次のように述べる。

明治以降、本土から常に強大な「圧」を受けながら、世界という舞台に水を得て躍動し、成果を積み上げてきたウチナーンチュ同胞の足取りに、沖縄と国外双方の人々が胸を熱くする。その記憶と感情の共有に支えられたもの。『還流する魂』221 ページ

しかし、この高揚と県民の温かい反応は当初からあったのではないと言う。長く WYUA の代表理事を務めてきた玉元三奈美は、次のように語っている。

(2006 年の) 第四回までは「ハコモノの大会」と呼ばれていて会場は宜野湾のコンベンションセンターだったのです。海外の参加者だけが集まって、沖縄の人は親族さえ入ることができなかった。それが第五回から野球場での開かれた大会になりました。「次世代への継承」と「県民への周知」というふたつの課題のうち、「県民への周知」は、こうして成果が出てきた。『還流する魂』205 ページ



閉会式、最高に盛り上がる

こうした企画を考えるのは、きっと革新県政の時だろうとヤマトンチュは思いがちだが、第1回大会が開かれた1990年当時は、沖縄保守のドンと評されていた西銘順治が知事の時である。そもそも保守 vs 革新という一面的な括りが沖縄政界に定着していったのは、政党のヤマトゥへの系列化がもたらした

たものとも言えるのだ。

ヤマトゥ政府を介せば基地問題の進展をはかれないとの判断から、1985年、西銘は沖縄県知事として初めて訪米し基地問題を訴えた。この訪米では、アトランタとハワイで県出身者やその子孫とも交流を深めた。ハワイでは姉妹提携

調印式が開かれ、ハワイ移民 100 年祭にも出席。式典後、現地の人たちの歓迎に深く感動した西銘は、「ウチナーンチュはみなチバトーンドー（頑張っている）。一度全員集合したいな」と県人会の幹部に伝えた。さらに 1984～85 年に『琉球新報』が大型企画した「世界のウチナーンチュ」に西銘は着想を得た（のちに琉球新報社編『世界のウチナーンチュ』全 3 巻としてひるぎ社から出版）。こうした経験が 1990 年の第 1 回大会開催につながっていったのだった。

「一にも二にも人づくり」を口癖としていた西銘は、知事時代に沖縄県立芸術大学を開学し、沖縄の文化を継承していく人材を育成するために県人材育成財団を創設、沖縄県国際交流財団を設立した。また国際会議の誘致を見据えて沖縄コンベンションセンターも建設している。

「沖縄の心とは何か」という記者の質問に「それは、ヤマトンチュになりたくて、なり切れない心だろう」と答えた出来事は人口に膾炙している。1985 年 7 月 20 日付『朝日新聞』に掲載されたこの発言は、ウチナーンチュのアイデンティティーを表現した名言として沖縄だけでなく全



第 971 回大阪行動(2023 年 5 月 6 日)

国的に大きな反響を呼んだものである。この名言に対し、沖縄のヤマトウ化がここまで進んでしまった戯言^{ざれごと}として「ウチナーンチュになりたくて、なり切れない心」と言われたりすることが、もう一方にある。

ここに見られるように、中央政府、ヤマトウ社会からの同化政策（＝攻撃）と、それに抗する自立を希求する営為がせめぎ合っているのが、今日まで続く沖縄（ウチナー）の現状であるといえるのではないだろうか。